

卒業独唱音楽会

5月13日 月曜 天気晴れ

久しぶりに、他人の歌う歌を鑑賞した。

労働節(メイデー)の連休が終わり、学期もちょうど後半に入った。その頃、図書館で見かけた大学付属美術館の案内がきっかけで、芸術系の校舎が並ぶ南院キャンパスの奥に通うことが多くなった。例の大学前の黄河路と呼ぶ大通りを陸橋で越えるとそのまま南院へと入る。左折してプラタナスの緑陰をかなり歩く。右手に南院音楽庁の建物があつた。

この日の午後、ここで音楽院主宰の院生の卒業独唱会が催された。横に広い観客席を二百近くもつホールには、わずか十数人の観客が前の方に陣取り、部外者と言える私の方は、奥の方に席をとって鑑賞。二人の女性の歌手が古典と民族楽曲を披露した。所詮、学生のことだからパーフェクトとはいかない。しかし、こういう行事には卒業記念と言うことなのか、写真屋さんが来ていて演唱中もフラッシュをたきながらシャッター音をしきりに立てる。それに面食らってしまった。歌手の声が小さいわけではなく、その音がとてもうるさいのだ。これではせつかくの演唱も、興をそがれてしまった。写真屋は撮影することを依頼されたので、それが演唱にそぐわないなどとは思っていない様。しかも観客席の十数人には、歌手の同学の仲間もいれば、教えて来た先生もいた。そうした人たちが写真屋の行為に無関心で、やめさせようもしない。それが不思議だった。

写真屋は角度を変えて写真を撮りたいらしく、座っている近くにもやって来た。いてもたってもいられず、席を立ててさらに奥の方へと移動した。ささやかな抗議のつもりだった。

翌14日 火曜日と同じ場所で音楽院生の卒業独唱会が催された。この日は劉曉宇さんという女学生が一人舞台に立った。手許にあるプログラムには、やはり中国の作曲家が作った民族歌謡もあるが、明治以降の日本の音楽教育で西洋音楽が紹介されたように、ここ中国でも声楽曲としては、ベリーニの作品もあったし、プッチーニのラ・ボエームからの作品も採用されていた。歌は上出来とまでは言えなかったが、写真屋さんは、この日もやって来た私に遠慮してか、少しは控えめに行動していた。しかし、この経験もこの地で時々経験した、ちぐはぐ感のある体験だった。

日本では、というより音楽を聴く態度としてはどこの国でも絶対にあつてはならない風景だったと思う。こういうところにも、今の中国が何か背伸びして外国の音楽を移入する一方、肝心のところが欠けているという思いがした。



独唱会発表後の院生劉曉宇と指導教官。伴奏のピアノはベーゼンドルファーだった。

この演唱会の後も、私はこのホールに行くことがあった。そこから、人の交友関係も新たに広がっていった。

大学の一年は、6月で終わる。7月からは学年末の夏休みとなる。この5月から6月にかけては、卒業に関連するイベントがいろいろ行われていた。